

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

6月5日午後、近鉄檍原線の石見駅から東方の今里の集落へ向かう。この日、今里と南隣の鍵の集落でジャマキ(蛇巻き)と呼ばれる野神行事がある。今里橋で寺川を越えると杵築神社の森が見える。

午後1時ごろからジャ作りが始まった。今年の本當屋、昨年の送り当屋、来年の迎え当屋それぞれ3軒、あわせて9軒の男たちが作る。行事用に栽培した麦藁を編んだ3枚ほどの束を二つ折りにする。これを四つで一つのジャの頭とし、「八つ頭」になる。この部分

で、それ以下の子供は、頭に続く尾を持つ。鍵の八坂神社へ行く。

ジャは既に完成している。頭の形は、今里とは異なり、藁束を三角に積み上げた形で、上部には檻の枝が挿してある。後ろには境内の奥まで尾が続いている。宮司のお祓いと祝詞のあと、2時ごろ、13歳から16歳の男子がカシラ持ちとなつて、境内から担ぎ出す。

後ろの尾は小さな子供たちが繩を担いでいる。

ジャの前には青竹の先端。中には農具の模型が



ジャを担ぐ鍵の今年のカシラ持ちたち

3時前ごろ、今里でもジャが出来上がる。拝殿で簡単な直会をしてから、ジャを担ぎ出す。人々は戸口を明けて、ジャの来訪を待っている。ジャを玄関から突き入れて

ここでは八王子信仰と習合して福神となり、住民を祝福してまわる。行事はもとほ5月5日で男のセックの日だった。子供から大人へ最後の場面で重要な農耕儀礼を済ませてから、村の若い衆へ仲間入りする通過儀式の意味も担った行事だ。

ノミ(櫻)の木にジャを巻き付け、その根元の祠に、牛馬の絵馬と農具の模型を納める。両地区ともに、ジャを納める所はハツタハン、ハツオハンと呼ぶ。八王子なのだ。

住民祝福する蛇巻き

表)

(奈良民俗文化研究所代
隔週掲載)